

「小樽焼」をリメイク、陶芸家が嫉妬するような質感のガラスに挑む

木村直樹
北海道／ガラス作家

小樽のガラスシーンを盛り上げる

「LEXUS NEW TAKUMI PROJECT」(主催：レクサス)は、日本各地で地域の独自性や伝統技術を生かして新しいモノづくりの「匠」を応援する。



木村さんのプレゼンの様子

本プロジェクトは2016年、放送作家として「料理の鉄人」などの多くのヒット番組を手がけ、またくまモンの生みの親でもある小山薫堂氏をプロジェクターのスーパーバイザーに迎え、隈研吾氏建築家、東京大学教授、生駒芳子氏(ファッション・ジャーナリスト)・アート・プロデューサー(下川一哉氏)と匠研究所(ら)をサポートメンバーに発定。昨年度は、52名の匠によるプロダクトが誕生。若き匠の挑戦が刻まれたプロダクトは、ふるさと納税の返礼品への採用や、ロックフェラー家主催のチャリティイベントへ出品されるなど注目を集め、匠自身もTVやWebメディアへの掲載など目覚ましい活躍を見せている。

2年目となった今年は、全国47都道府県から計51名の若き匠が選出。昨年夏、レクサスギャラリー高輪で行われたキックオフ・セッションを皮切りに、サポートメンバーが実際に工房を訪ね、途中経過のプロダクトをう

レクサスが日本全国の「匠」のモノづくりを応援

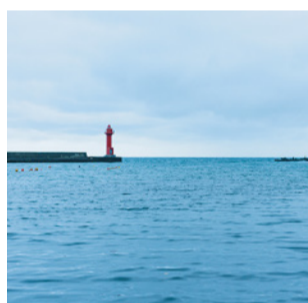
「世界」へ広く発信する。LEXUSが掲げる「二律双生」を、地方創生×モノづくりの視点で実現するプロジェクト。北海道選出の匠、ガラス作家の木村直樹さんのモノづくりへかける思いと完成した作品を紹介する。



ギャラリーに並ぶ作品

留辺蘂町(現在の北見市)生まれの木村さんは、高校卒業後に道外で働くも、ふと北海道に戻りたくなったそんな時に出会ったのが、小樽のガラス工房のホームページ。それまでガラス工芸とは全く縁がなかったが、目に飛び込んでくる作品たちを心奪われた。

19歳でガラス工芸の世界に飛び込み、貪欲に技術を吸収した。しかし、どうにも上手くいかない。いつの間にかガラスから気持ち離れてしまい、小樽を後にしてしまう。しかし、「君がいないことは小樽にとってもったいない」と手を差し伸べてくれる人がいた。小樽に戻り、ガラス作りと正面から向き合う楽しさに気づいた木村さんは、26歳で工房を構えた。



工房の窓からは日本海が見える

市街から少し外れた漁師町の海岸線に木村さんが主宰する「Kin glass design」がある。

小樽の街並みを歩いていると、あちこちで美しいガラス製品に出会う。小樽のガラス産業は明治期漁業用浮き玉の製造から始まった。時を同じくして、小樽には100年愛された陶器「小樽焼」があった。今回のプロジェクトでは、小樽の一大産業となったガラス工芸で、閉塞した小樽焼をリメイクすることにより、小樽ガラスに興味がない人たちにアプローチしたい。そう思うことによりこの先の100年、小樽ガラスが市民に愛されることを目指したという。地域振興イベント「小樽がらす市」の実行委員長も務める木村さんらしい考えだ。



エリア・コンサルティングにて

「頼みだる風」。異なる高さの精巧なガラス数十本により、風にたなびく様子が見事に表現されている。また、色付けには蛍光スプレーを使うなどの工夫を重ね、道内の出品者の中で最高の「現代工芸賞」を受賞。常識にとらわれず、素材や道具を生かして新しいことにどんどん挑戦したいと木村さんは語る。

広告

企画・制作 LEXUS NEW TAKUMI PROJECT 実行委員会



スーパーバイザー
小山 薫堂氏

1964年6月23日 熊本県天草市生まれ。日本大学芸術学部放送学科に通う。伝説の深夜番組「カノッサの屈辱」でその名を世間に広め、「進め!電波少年」や「料理の鉄人」など、数多くのヒット番組の企画・構成に携わる。「くまモン」の生みの親でもある。



1月17日、プレゼンテーションにて



「小樽焼」の色合いをガラスで再現



木村さんの作業道具



木村 直樹
北海道／ガラス作家

1984年北海道北見市留辺蘂町生まれ。2011年KIM GLASS DESIGNを設立。2014年シアトルビルチャックガラススクール参加。美術展への出展など積極的に創作活動を続ける。また小樽がらす市実行委員長も務める。2016年日本現代工芸美術展 現代工芸賞受賞。

LEXUS
NEW
TAKUMI
PROJECT



完成プロダクト「新・小樽焼(小樽緑青硝子)」の「群来」と「蓮葉水」



素早い動きで形を作っていく

「最初からコンセプトが固まっていたし、サンバルづくりで苦戦することはなかったと木村さんは胸を張る。もちろん時には悩みや葛藤もあったが、エリア・コンサルティングで下川氏から「陶芸家が嫉妬するような質感のガラスだね」という言葉をいただき、「抱えていたもやもやが一気に吹き飛んだ」と語った木村さん。方では、全国の匠と交流することにより自信をなくしたり、逆に自信になったりと、プレ・プレゼンテーション以来、ずっと胸がさわついていたと正直な心境も吐露した。「噛み砕くにはしばらく時間がかかりそうです」と笑顔で語った。

「蓮葉水(はずはぐおり)は、漆黒の冬の小樽運河一面に浮かぶ割れた氷をブルーで表現した。ガラスの光沢感と陶器の落ち着きの両方を兼ね備えたガラス器、新・小樽焼(小樽緑青硝子)がここに完成した。

今回の挑戦では、ガラスの良さでもある透明感をあえて抑えた。陶器のリメイクという、どちらかというと精神性への挑戦だった。そもそも今回の案は、独立時にお世話になった

方からの『落ち着いたら俺のためにあの小樽焼をガラスで作ってくれ』という依頼がもとになっています。ただ、約束を果たす前に彼は急逝してしまいました。木村さんにとって今回のプロジェクトへの参加は、恩人との約束でもあり、自身への挑戦でもあり、小樽のガラス工芸の未来への布石でもあった。さらにこの世界で高みを目指そうと思えるようになった。以前よりガラスが好きになった気がします。」

プレゼンテーションを終えた木村さんのブースには次々とバイヤーや他県の匠が訪れ、群来のガラス特有の透過性や蓮葉水の陶器と見間違え質感に感嘆の声が漏れていた。全国の匠と交流し様々な感情が芽生えた。普段は欧米のアーティストから学ぶことが多いが、日本人だからこそできる表現や北海道在住だからこそ感じられるものがまだまだありました。海から生まれたガラス産業を、海辺の町で受け継ぐ匠・木村さんの、進化“にこれからも注目したい。

恩人との約束を守りたい

木村さんのプロダクトは二種類。懐かしくも、新しくも感じてもらいたい器だ。「群来(ぐんらい)は、大量のニシンが海岸に押し寄せ産卵することでグリーンやターコイズブルーに輝く海の色を表現。もう一つの